



① コロナをめぐる「専門家」とウイルス学者の考え方の違いは甚だしい。評者は以前から後者の本に注目してきたが、宮沢孝幸『ウイルス学者の責任』（PHP新書、1078円）の主題は「100分の1作戦」で、浴びるウイルス量を100分の1に減らせれば感染は防げるという提唱は明快で本質を突いている。等閑視されてきた「ウイルスの量」を提起しているのが肝である。まず換気、軽い手洗い、適切な（過剰でない）マスクで十分とされる。「無症状の人と濃厚接触しても感染するリスクはほぼゼロ」で、陽性でも

ウイルス量を考慮した対策をとるべきだったというのは決定的に重要である。結果的に「ウイルス学の常識を知らない医師たちの意見で国の政策が決められてしまった」と手厳しい。ワクチン接種も落とし穴があり「リスクとベネフィットを個人が考えて接種を決めればよい」。確かに。

② 日本の産業も企業もマクロ経済も沈滞が続いて久しい。他国に謙虚に学ぶことと、個を確立して独自の強靱な供給力を作り上げることの両方が必要と思うが、原田泰ほか編著『学ばなかつた日本の成長戦略』（中央経済社、2310円）は前者に注目して多面的に分析を行っている。具体的には日本は先進国グループから脱落した平凡な国になってしまっているとの認識の下で、規制や制約を取り払い、企業は他の国々

の成功事例に学ぶべきだとの認識である。

総論に続き雇用と経営の状況が批判的に論じられ、電機、情報サービス、自動車（EV、自動運転）、金融、観光などの産業が世界標準から取り残されつつある現状が粗上に載る。個々の分析にばらつきはあるが、総じて的確な指摘が多く、効率よく現状と課題を知ることができる。沈滞は制度、官の規制と自己規制、経営者、企業組織、消費者の性向などの複合要因だろうが、これを機に議論が深まることを期待したい。

③ 介護の現場でベッド、車いす、トイレ間を人々を移動させる作業は重労働である。そこでも走行式の介護リフトの出番なのだが、これにも欠点はある。かくして逆転の発想により固定式リフトを壁、柱、玄関、トイレ、風呂に設置す

るといふ発明をした著者による森島勝美『奇跡の介護リフト』（幻冬舎、1650円）は波乱に満ちた開発物語だ。リフトは高齢化社会にあつて決定的に重要な介護インフラで、その開発とマーケティングの一部始終は社会的にもビジネスの面でも極めて重要なドキュメントである。

④ ホームズが活躍するのは建物の中が多い。北原尚彦・文、村山隆司・絵と図『シャーロック・ホームズの建築』（エクスナレッジ、2200円）はベイカー街221Bから事件現場のさまざまな館までカラーで外観と間取りを描き、トリックも含め解説している。時代考証とホームズばりの推測で出来上がったユニークな力作である。ホームズを読むときは手元に置いて確かめれば楽しみは倍加するだろう。（浅野 純次）